何でもできるわけです。逆に、この辺がパソコンをかえってわかりづらくしています。なにしろ一言で表現できないのです。

　さらに困ったことに、パソコンは単体では何もできません。「パソコン、ソフトなければただの箱」

といわれているほどです。ソフトウェアを組み込むことで初めて機能する機械なのです。場合によっては周辺機器を拡張しなくてはいけません。それによって、初めて「何でもできる」というわけです。

　パソコンは完成された製品ではありません。半製品です。この半端なところがパソコンの大きな特徴です。このような半製品をいかにも完成品のように売ってしまうところが、パソコンを産んだ国アメリカならではの発想でしょう。何に使うかはお好きにどうぞというわけです。なにしろ、パソコンを産んだのも育てたのもアメリカですから、パソコンにはアメリカの文化が色濃く残っています。カタカナや英語が幅をきかせているのもその名残りです。

　ここではパソコンをこう考えましょう。パソコンは「素材」です。「可能性への素材」なのです。パソコンとソフトと周辺機器、これらを組み合わせることで、さまざまなことが可能となるのです。

　この第５章では、パソコンという素材にソフトと周辺機器を組み合わせて、何が可能になるかを探ります。

## ワープロで文章を書く

　パソコンで最もよく利用されているソフトは「ワープロソフト」でしょう。これは文章を書くためのソフトで、オフィスでビジネス文書を書いたり、個人的な日記や手紙を書いたりすることができます。あまりにもこのソフトの需要が多いため、日本のメーカーはワープロの機能があらかじめ導入されている、文章作成専用のパソコンまで開発しました。それが、ワープロ専用機です。このことは前ページで触れました。

　当初のワープロは、美しい文書を簡単に作成できることが注目され、主に清書用としてオフィスで使われました。しかし、ワープロの真価は、美しい文書を書くことだけではありません。推敲を重ね、思考をまとめながら文書を作成できることにあります。まず、思いつく言葉を並べたり、一番書きたい文章から最初に作成し、その前後に文章をつけていくことで、次第に文書を完成させていくことができます。文章作成の能力がなくても、どうにかこうにか文書が作成できるようになるのです。これが、原稿用紙と鉛筆で書く作業との最も大きな違いです。

　また、いったん作成した文書をサンプルとして保存し、後でその文書を流用して、そこから新たに文書を作成することもできます。

　もちろん、編集機能も見逃せません。文字の形(フォント)を変えたり、大きさ(フォントのサイズ)を変えたり、センタリングや左寄せ、右寄せなど、文書を見やすく加工できます。

　さらに、今では表やグラフ、お絵描きなど、たくさんの機能が満載されています。　その代表的なワープロソフトにジャストシステムの「一太郎」があります。また、マイクロソフトの「ワード」も有名です。これらはぜひ揃えておきたいジャンルのソフトです。